



Vol.2

発行 2003年8月
動物愛護ボランティア
《ねこの会》

事務局：TEL/FAX 0263-36-2192

地域ねこ共生モデル事業

岡田英二

昨年、所有者のいない猫の対策として長野県の事業である「地域ねこ共生モデル事業」が実施されました。この事業は、糞尿や植木荒らしなどの生活環境への被害を内容とする外猫の苦情が後を絶たないことや、犬とは対照的に、猫では引き取り・捕獲数が平成13年度には4470頭へと大幅に増えてしまったことへの窮余の一策として、さらに、人と猫が共生する心豊かな地域社会を構築することを目的に行われました。

対象モデル地域は市町村の推薦により6地域が選ばれ、「ねこの会」が主体となって所有者のいない猫の生息調査と個体管理表（カルテ）を作成し、全地域で120頭の猫を地域猫の対象として確認しました。これをもって県・市と共に事業説明会を行ったところ、当初予想していた反対意見どころか、「もっと早くやって欲しかった」、「出来ることは何でもする」等、各地域の町会長より肯定的な意見が多数返ってきました。

説明会后、保健所、長野県動物愛護会松塩筑支部と協力体制を取りながら、各モデル地域の当会ボランティア（有志）が、小諸市にある長野県動物愛護センターへ搬送し、センターで術前健康調査や不妊・去勢手術、個体識別標（耳ピアス）の装着をしていただき、また元の生息地域へと戻すことを行ってきました。地域では当会で作成した「地域猫ルール」に基づき有志が定時定点における給餌給水、排泄物処理等をし、地域猫の適正な管理と周囲の環境保全に努めています。

開始直後より、「おしっこ掛けや争いの喧噪が無くなった」、「決められた時間に決められた場所に猫が集まるので徘徊する猫がいなくなった」、また「隠れて猫に餌をあげる人がいなくなり、管理が容易で環境美化が向上した」という声が聞かれるようになりました。さらに新聞等で事業を知った地域外の方々からも「うち

でもやって欲しい」という要望が寄せられました。

顕著な効果が現れるのは外猫の寿命といわれる3～4年後で、事業もその期間行われる予定でしたが、県の財政難により、結果が出る前にたったの1年で終了とさせられてしまったことが本当に残念でなりません。

平成15年8月近況

山本千夜子

（「やぶやぶの庭」著者）

自然の環境がまだ残っているこのやぶやぶの庭に、絶え間なくやってきたのら猫達と、約半世紀共に暮らしてきました。

彼等とかかわっていますと、人間社会がよくみえてきます。のらになった彼等は、もっとも弱い立場に立たされ、常に命と向き合っています。

娘の友人が、畑の道で、死んでいるのかと思われた、片手にもる小さな子猫を、「何とか助けて」と抱いてきました。頭が化膿してふくらんでいて、目、耳、口からも血うみが出ていて、かすかに呼吸しているだけの状態でした。口からアワを出して、けいれんする度に、この子にとって一番幸せなことは、うみと悪臭のする小さな体をやさしくきれいに洗って、やすらかな最後を迎えさせてあげられることだけだと、誰もが思いました。

獣医さんに処置していただくと、腐った皮膚の下には、頭から顎にかけて、太いクギにでも打たれたかのような穴が貫通していて、耳の付け根に添って大きな切り傷もあったのです。交通事故では考えられないその傷に、身震いするような人間社会の恐ろしさを感じずにはられませんでした。

今では、良心的な獣医さんのお陰で、日に日に元気をとりもどしています。